九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[031] 語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10238

出版情報：語文研究. 31/32, 1971-10-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

語文研究　第三十一・三十二号

中村幸彦先生送別特輯

思い出すままに

福田良輔

中村さんが、杉浦さんが不幸不治の病で倒れられた後、国文学を主とする国語学・国文学第二講座を担任されたのは、昭和三十六年四月であった。杉浦さんも、中村さんも天理大学時代を中心に、頴原退蔵先生の指導を受けられ、研究を共にされた知友関係にあったので、私はよい後任者を得ることができたことをよろこんだのである。

中村さんは博識を以って鳴り、江戸文学の権威者であることは、その数々の業績と共に誰しも認めるところである。この事については、他に語るべき適当なお方があると思うから、門外漢の私はこれ以上触れないことにする。ただ一言申し述べたいことは、研究方法はあくまで実証主義であり、それが九大国語学・国文学科の伝統的な特徴の一つである実証的研究と一致し、中村さんの来任以来、九大国語学国文学講座のこの学風は一段と発揮され、多くの有望な若い江戸文学研究者・国文学研究者を育成されたことである。私が二十余年勤めた九大を、心おきなく停年退職することができたのも、中村さんに負うところが大きい。

九州における中村さんの活動も著しい。「島原文庫」を整理され、同文庫の価値が広く学界に認められるようになったのも、中村さんの功績である。また、「西日本国語国文学会」の事業として、『西日本国語国文学会翻刻双書』が刊行されたのも、中村さんの賜である。

この一事だけでも、中村さんが、学問研究の才のみならず、事務的才能にも恵まれたお人であることがうかがわれるが、九大で講座関係の学会の開催を引受けた折など、いつもてきぱきと裁かれて、無事済ますことができたのも、中村さんの勝れた事務的手腕によるところ、多大なものがあった。

中村さんは、信念の人である。私が退官して間もなく、世界の大学が、そしてわが国の大学も大学紛争に襲われた。九大も例外ではなかった。大学紛争の最も烈しかった時に、その事務的才能とそのお人柄が認められて、学部長に推され、難局にあたって、毅然として自己の信念を貫かれたと聞いている。

私たち国語学・国文学の教官四人の研究室は、同じところに集まり、隣か、向かいにあった。何か相談事があると、ある時は相談事がなくても、誰かの室に集まったものであった。時には熱を帯びることもあったが、歯に衣を着せるようなことはなく、思う存分に話し合い、最後にはいつも一致した結論に達し、嫌な思いが残るようなことはなかった。そんな時に、多くのばあい、中村さんか、私かが言い出して、四人で中洲たりに出かけて杯を手にして、またとりとめもない雑談に興じた。春日さんも、今井さんも酒が嫌いな方ではない。私はほんとに居心地のよい講座と思った。

中村さんは、酒を楽しみ、酒に興ずる人であった。中村さんの口には、甘口が多い九州の酒は合わなかった。辛口の方が好きであり、酒の吟味にも精しく、たしか「剣菱」を愛飲されたと思う。バスがなくなり、遠いお住まいまで、タクシーを飛ばされることもしばしばであった。

中村さんは、九大文学部にとり、惜しい人であり、私個人にとっても益友であった。同僚としての九大の十年間、学問の上でも、また人間的にも教えられるところが多かった。中村さんが、故郷に近く、縁故深い関西の地に去られたことは、心残りがするが、今井さんという立派な後継者がおられ、安心して去られたこと、思われる。その心境は、私が停年退職した時の気持ちと恐らく似通うものがあると思うからである。

送別記念号によせて

白石悌三

「ところで中村幸彦という学者は、本当に偉いのかね」

「偉い、日本一偉い」

ある時、東京の仲間の一人が、私を試みるように悪戯っぽく尋ね、もとより中村先生の学問を知悉している彼は、私の答えの稚い響きに笑った。日本一偉い学者の指導下に過したという履歴は、私にとってあまりにも重すぎる。自負と慙愧の表裏する思いの中で、その負担に堪えていることが、今の私には精一杯の誠実であるように思う。そんな先生を対象化して、私的回想であれ云々するなど私にはできない相談である。第一、そういった私小説性は先生の一番お嫌いな所である。しかし受講生代表が、かく逡巡することもまた先生の本意ではなかったと思う。やはり先生の九大時代は学生に恵まれなかったと言わざるをえない。先生の学統を継ぐ人々は、むしろ九大の外に多い。先生は学界の第一人者であり、その第一人者を九大が迎えていたという意味で、それは別に先生・九大ともに恥じることではないかもしれないが、先生が教壇に立たれたのは前にも後にも九大が一番長かったという退官の御挨拶をうかがった時、私はやはり忸怩たる思いに耐えられなかった。その私どもに一つだけ自信を持って言える事がある。真贋鑑定の眼を肥やすには常に一流品に接する事だと言われるが、一流の学者に親炙してきた私どもは、研究者・研究業績の真贋を見抜く眼を識らず識らずに培ったようである。私など不敏にしてどっちみち大成しそうもないが、本物の何たるかを知った以上、偽物として大成する道はけっして歩まないだろう。おそらく後輩の誰も、先生の直接の指導下を離れた今後、どんな虚仮威しに遇ってもまず晦まされる事はないのではないか。この自信だけを、九大を去られる先生へのせめてもの餞けとしたい。

以下、私事にわたるが、先生は後年、私の指導については臨終の杉浦さんから後事を托されたのだという事を幾度か言われた。当時大学院に進学したばかりの私は、杉浦先生が心を残されたごとく、無知同然であった。その点で私は、学界で杉浦門下と称される諸先輩と同列ではない。それら諸先輩によって辛うじて引き立てられたようなわけで、強いて言えば孫弟子に当る。言われるまでもなく杉浦先生の遺徳によって育てられた私

は、その御恩を忘れないつもりだが、実際の学問の手ほどきは中村先生から受けたと自覚している。先生に恥じて弟子という言葉は使わないが、私は九大に学んだおかげで生涯の師にめぐり逢えた僥倖をひそかに感謝している。先生の学問に対する貧しい理解は本誌十三号の『近世作家研究』紹介に意を尽さぬまでも述べたが、私が先生から強く影響を受けたのは、必ずしも狭義の学問ではなかった。

先生の学問にかかわる根本の態度は先生の人生態度にも通じるのであって、そこに専門家としての強い衿持が窺われる。したがって、先生は世事においても専門家なるが故に即決断行の人である。もとより即決は識見の裏付けがあって合理となるわけで、皮相に見做っても徒らにふりまわされるだけだが、一方、事に及んで決断を保留する慎重論を先生は採られない。断行の果てに開ける展望に賭けて事を回避されない。知識の乏しい事は致命的であるが、量を質として識見に転化できない者もまた俗物という事であろう。私は自らの無知を棚上げにして、ここ数年特に先生の反俗精神に共感する所が大きかった。

無知と言えば、先生が九大に赴任されて暫く、私は自分を裸にする事ができなかった。先生が他人の前では恥をかかせないように配慮されるため、余計、無知を見すかされていることに竦んで素直になれなかった。先生は無知であれ、求める者には親切で、即座に指導を惜しまれないが、「好きこそ物の上手」という価値観を以て、後追いしてまで学問せよとはおっしゃらない。生来人に頼りすぎる私は、暫くとまどって先生が情の人である事を理解できなかった。尤も、私の無知を一番よく御存知なだけに当時にもまして恐い存在であるには違いないが、今では一番安らぎを覚えるのもまた先生の許である。先生には人が見えすぎるのだと思う。だから先生の評価は厳しい。とりわけ野暮はお嫌いだし、半可通には厳しい。しかし評価は評価として、先生は常に人を善意に解し、善意に遇する事を心がけられた。これまた私が肝に銘じた事の一つである。

先生について語るべき事は多いが、今はまだその時機ではない。学恩に報いる事はおろか、酒代の持ち方ひとつ知らぬふがいない教え子達にとって、何一つ貸しを作っては下さらぬ先生というのも辛いものだが、今後旧恩に甘えず、敢えて借りを作りに門を敲く事のできる私どもでありたいと思うのみ。所与の枚数にも満たぬが、苦手な筆を置かしていただく。

先生には当分、世事に門を鎖して数年来の激務のお疲れを癒していただきたいと思うのだが、詮ない願いであろうか。くれぐれも御自愛の程を。

中村幸彦先生九州大学在任中職歴

昭33・4・1　九州大学文学部教授、国語学国文学第二講座担任。

昭33・4・1　九州大学文学部教授（旧制）併任。

昭33・4・1　九州大学大学院文学研究科指導教官。

自昭34・5・1　至昭35・3・31　九州大学教育学部講師。

自昭33・5・1　至昭33・8・1　天理大学兼任講師。

自昭35・4・1　至昭37・3・1　附属図書館商議委員。

自昭35・4・1　至昭36・3・31　広島大学文学部講師。

自昭36・4・1　至昭38・3・31　学生部参与。

昭37・4・16　天理大学非常勤講師

自昭37・4・16　至昭38・3・31　佐賀大学文理学部講師。

昭38・4・16　天理大学非常勤講師。

昭38・10・1　印刷所商議委員

自昭39・4・1　至昭40・3・31　九州大学教育学部講師。

自昭40・10・16　至昭41・3・31　山口大学文理学部講師。

自昭40・12・1　至昭42・3・31　九州大学文学部附属九州文化史研究施設教授（併任）。

自昭41・4・1　至昭42・3・31　熊本大学教育学部講師。

自昭42・4・1　至昭43・6・30　九州大学評議員。

自昭42・4・1　至昭44・3・31　九州大学文学部附属九州文化史研究施設教授（併任）。

自昭42・4・1 至昭43・3・31 東北大学文学部講師。

自昭43・4・1 至昭43・7・16 国語学・国文学第一講座担当。

自昭43・7・1 至昭43・11・1 九州大学文学部長。

自昭43・7・1 至昭43・11・1 九州大学評議員。

自昭43・11・1 九州大学大学院研究科長。

自昭44・4・1 至昭46・3・31 九州大学文学部附属九州文化史研究施設教授（併任）。

自昭44・4・1 至昭45・3・31 九州大学教育学部講師。

至昭44・7・15 至昭46・11・30 九州大学評議員。

昭44・11・23 九州大学永年勤続者表彰。

自昭44・12・1 至昭45・4・1 九州大学文学部長事務取扱。

自昭44・12・1 至昭45・4・1 九州大学評議員。

自昭44・12・1 至昭45・4・1 九州大学大学院文学研究科長。

自昭45・5・1 至昭46・3・31 九州大学評議員。

自昭45・7・6 至昭46・3・31 教養部審議会委員。

昭45・7・28 学術審議会専門委員。

昭46・3・31 九州大学教授辞職。

講義題目

昭33・4～33・9
（大学院）国文学特研　近世文学意識の研究
（大学院学部）国文学講義　近世文学史
（全）国文学演習　西鶴置土産

昭33・10～34・3
（大学院）国文学特研　近世文学意識の研究
（全）国文学演習　芭蕉の俳諧
（大学院学部）国文学講義　近世文学史
（学部）国文学演習　西鶴置土産

昭34・4～34・9
（大学院）国文学特研　比較文学の諸問題
（全）国文学演習　西鶴の小説
（大学院学部）国文学講義　近世文学史
（学部）国文学演習　俳諧七部集

昭34・10～35・3
（大学院）国文学特研　比較文学の諸問題
（全）国文学演習　西鶴の小説
（大学院学部）国文学講義　近世文学史
（学部）国文学演習　国性爺合戦

昭35・4～35・9
（大学院）国文学特研　書誌学の問題
（全）国文学演習　風俗文選
（大学院学部）国文学講義　近世小説史
（学部）国文学演習　国性爺合戦

昭35・10～36・3
（大学院）国文学演習　風俗文選
（大学院学部）国文学講義　近世文学史
（学部）国文学演習　万の文反古

昭36・4～36・9
（大学院）国文学特研　国学の方法
（全）国文学演習　近世後期小説
（大学院学部）国文学講義　近世文学史
（学部）国文学演習　万の文反古

昭36・10～37・3
（大学院）国文学特研　国学の方法
（全）国文学演習　近世後期小説
（大学院学部）国文学講義　近世文学史
（学部）国文学演習　冬の日

昭37・4～37・9
（大学院）国文学特研　注釈の問題
（大学院学部）国文学演習　仮名草子
（大学院学部）国文学講義　近世文学史
（学部）国文学演習　蕉門の俳諧

昭37・10～38・3
（大学院）国文学特研　注釈の問題
（全）国文学演習　仮名草子
（大学院学部）国文学講義　近世の文学思潮
（学部）国文学演習　近松の世話浄瑠璃

昭38・4～38・9　（大学院）国文学特研　作家論の問題
（全）国文学演習　西鶴の小説
（大学院学部）国文学講義　近世の文学思潮
（学部）国文学演習　近松の世話浄瑠璃
昭38・10～39・3　（大学院）国文学特研　作家論の問題
（全）国文学演習　西鶴の小説
（大学院学部）国文学講義　近世の文学思潮
（学部）国文学演習　西鶴　本朝二十不孝
昭39・4～39・9　（大学院）国文学演習　芭蕉　晩年の俳諧
（大学院学部）国文学講義　近世の文学思潮
（学部）国文学演習　西鶴　本朝二十不孝
昭39・10～40・3　（大学院）国文学演習　芭蕉　晩年の俳諧
（大学院学部）国文学講義　近世小説史
（学部）国文学演習　芭蕉七部集
昭40・4～40・9　（大学院）国文学特研　書誌学の方法
（全）国文学演習　近世歌論書
（大学院学部）国文学講義　近世小説史
（学部）国文学演習　芭蕉七部集
昭40・10～41・3　（大学院）国文学特研　書誌学の方法
（全）国文学演習　近世歌論書
（大学院学部）国文学講義　近世小説史
（学部）国文学演習　近松の浄瑠璃
昭41・4～41・9　（大学院）国文学特研　表現の時代性
（全）国文学演習　山東京伝の作品
（大学院学部）国文学講義　近世小説史
（学部）国文学演習　近松の浄瑠璃
昭41・10～42・3　（大学院）国文学特研　近世文学観の諸問題
（全）国文学演習　山東京伝の作品
（大学院学部）国文学講義　近世小説史
（学部）国文学講読　武道伝来記
昭42・4～42・9　（大学院）国文学特研　近世文学観の諸問題
（全）国文学演習　風俗文選
（大学院学部）国文学講義　近世小説史
（学部）国文学講読　武道伝来記
昭42・10～43・3　（大学院）国文学特研　比較文学の新分野
（全）国文学演習　風俗文選
（大学院学部）国文学講義　近世小説史
（学部）国文学演習　芭蕉七部集
昭43・4～43・9　（大学院）国文学特研　近世文章史の研究

（大学院）国文学演習　都賀庭鐘の作品
（大学院学部）国文学講義　近世小説史
（学部）国文学演習　芭蕉七部集
昭43・10～44・3
（大学院）国文学特研　文人趣味の研究
（全）国文学演習　都賀庭鐘の作品
（大学院学部）国文学講義　近世小説史
（学部）国文学講読　雨月物語
昭44・4～44・9
（大学院）国文学特研　圏外文学の研究
（全）国文学演習　談義本
（大学院学部）国文学講義　近世小説史
（学部）国文学講読　雨月物語
昭44・10～45・3
（大学院）国文学特研　圏外文学の研究
（全）国文学演習　談義本
（大学院学部）国文学講義　近世小説史
（学部）国文学演習　好色一代男
昭45・4～45・9
（大学院）国文学特研　文壇の構成
（全）国文学演習　蕪村七部集
（大学院学部）国文学講義　近世歌論史
（学部）国文学演習　好色一代男
昭45・10～46・3
（大学院）国文学特研　明治の小説論
（全）国文学演習　几董新雑談集
（大学院学部）国文学講義　近世歌論史
（学部）国文学演習　其角雑談集